



NEWSLETTER

～ 水を守り 湖を救う ～

公益財団法人 国際湖沼環境委員会(ILEC)
本ニュースレターには、英語版もございます。

ILEC理事長新任のご挨拶

竹 本 和 彦



このたび、浜中裕徳前理事長の後任として2017年6月の理事会で選定され、公益財団法人国際湖沼環境委員会(ILEC)の理事長を仰せつかりました。ILECにおいても大変重要な時期にこの重責を担うこととなり、身を引き締めて、しっかりと役割を果たしてまいりたいと思います。

ILECはこれまで、多くの国々における湖沼流域に関する環境保全管理の考え方の基となる統合的湖沼流域管理(Integrated Lake Basin Management: ILBM)を2005年の第11回世界湖沼会議(ナイロビ)で世界に向けて提唱したほか、このILBMの世界的普及の推進、また2011年には国連環境計画-早期警報環境アセスメント局(UN Environment-DEWA)との直接の湖沼流域管理に関する連携協力協定(MOU)の締結、これに伴う世界の湖沼環境改善に向けた取組の推進、2013年の公益財団法人への移行など、大いに活動を進展してきたところです。

一方、世界の湖沼の現状は、人間による湖沼資源の持続不可能な利用や、進行する地球温暖化の影響などによって多くの湖沼環境の悪化が依然進行しています。地球上に存在する水資源のうち、人々が容易に使える

淡水は僅か0.01パーセントにしかなり、その僅かな淡水資源

の9割が湖沼とその流域に存在しています。このことは、湖沼環境の悪化が進むと人類の水資源に大きな影響を及ぼすことを意味しています。

2015年9月の国連サミットにおいて「持続可能な開発のための2030アジェンダ」とともに、今後15年に亘り行動を促進することを目的とした17の「持続可能な開発のための目標(SDGs)」が採択され、その目標の中には、新たに「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」ことが掲げられています。ILECには、こうした世界全体が目指す目標の達成に向けて貢献していくことが求められています。

今後とも引き続き世界の湖沼環境問題の改善に向けて、ILBMの普及推進や世界各地での湖沼環境保全の取組を支援し、UN Environmentとも連携し、湖沼環境分野における活動推進の中心的役割を担っていく所存です。皆様方には今後とも益々のご指導とご協力をいただきますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

今号のトピック

- ILEC理事長新任のご挨拶
- 理事長退任のご挨拶
- ILEC設立30周年記念事業
- 科学委員からのメッセージ(オーストラリア)
- 国際越境水域評価プログラム・湖沼グループのポータルサイトを開設
- 南米ILBMワークショップをブラジルにて開催

- 元JICA研修員からの便り(ジンバブエ)
- 2017年度 びわっこ大使の活動と世代間交流会
- ILECの活動概要(2017年度)
- WLC17 プレ会議 / 流域政策研究フォーラム
- 新規役員のご紹介
- WLC17 各種受付開始・第二回開催案内書発行
- ご寄付・ご協力ありがとうございます！

理事長退任のご挨拶

浜 中 裕 徳

このたび、2005年1月の就任以来12年間にわたる公益財団法人国際湖沼環境委員会(ILEC)理事長の職を退任することになりました。その間、第11回(ナイロビ)から第16回(バリ)までの6回の世界湖沼会議の開催運営に携わる機会をいただきました。様々な取組の中で、第11回世界湖沼会議での湖沼とその流域の資源の保全と持続可能な利用の考え方をまとめた統合的湖沼流域管理(ILBM)を提唱し、その後、アジアやアフリカなどの幾つかの国で、実際にILBMプラットフォーム・プロセスが進められ、様々な具体的プロジェクトに発展したこと、そして、その取組が国際機関からも評価され、2011年の国連環境計画-早期警報環境アセスメント局(UN Environment-DEWA)とILECとの直接の湖沼流域管理に関する連携協力協定(MOU)の締結に繋がっていったこと、それを中心に、UN Environmentと共に国際越境水域評価プログラム等の事業を進められたことなどが強く印象に残っております。また、その後2015年9月の国連サミットで2030年までに達成すべき行動目標である17の「持続可能な開発目標(SDGs)」を含む「持続可能な開発

のための2030アジェンダ」が採択され、SDGsの6番目(SDG6)に、「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」ことが掲げられたこと、そしてこのSDGsについて熱心に取り組んでこられた国際連合大学サステナビリ



ティ高等研究所所長の竹本和彦氏が、今般、私の後任として理事長に選任されたことは、今後のILEC活動の一層の発展にとって、非常に重要な意味を有するものと確信します。

ILECの創設のきっかけとなった「世界湖沼会議」は第17回目を迎えることとなり、2018年10月に日本の茨城県で開催されます。新理事長の下での第17回世界湖沼会議の成功と、今後の世界の湖沼とその流域の環境改善の進展、そしてILECの益々の発展を祈念しております。最後に、12年にわたる任期の中で共に活動を進めていただいた評議員、理事、監事の皆様、ILEC科学委員の皆様、そして、ご指導、ご協力をいただいた滋賀県の知事をはじめとする県職員の皆様に心からの御礼を申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

ILEC設立30周年記念事業

国際湖沼環境委員会(ILEC)は1984年に津市で開催された世界湖沼環境会議をきっかけとして、世界湖沼会議の継続的な開催の支援等を目的に1986年に滋賀県により設立されました。ILECでは設立30周年を迎え、湖の大切さとそれを守り共に生きることの重要性を訴え、そのための経験や情報の共有のために琵琶湖から世界へと交流の場を広げてきた財団の活動を国内、県内の方々に知っていただくための記念事業を実施しました。その第1弾として、2017年3月4日(土)から4月9日(日)まで、琵琶湖博物館の協力を得て、同博物館にて特別企画展示を開催しました。「湖と生きる-琵琶湖から世界へ 未来へ!」というタイトルのもと、「湖沼の危機に対し、ILECの活動がどのように貢献してきた



のか」を、動画や模型、視覚的に工夫したパネル等により、わかりやすいストーリーに沿って説明する展示としました。35日間の展示期間中、多くの方々にご来場いただき推定入場者数は約11,500名に上りました。

記念事業の第2弾としては、2018年1月27日(土)に琵琶湖博物館ホールでシンポジウムを開催しました。ILEC科学委員会総会のために海外在住の委員が来日していた機会を利用し、「湖沼・水辺の保全・活用に向けた取組み」をテーマに開催した当シンポジウムでは、同委員2名を含む海外3名、国内3名(団体)から活動事例の報告をいただいたほか、「つながり」を視点としたパネルディスカッションでは、活動の原動力や地域社会をどのように巻き込むかなどについての意見を伺いました。朝から雪の舞う寒い日でしたが、約130名の参加を得て、フロアからも活発な意見をいただきました。当記念事業にお越しいただいた皆様に、ここで改めて御礼申し上げます。

陸地における湖沼と湿地の繊細さとレジリエンス

チャールズ・スタート大学
土地水社会研究所 所長 コリン・マックスウェル・フィンレイソン



湖沼・湿地生態系の繊細さとレジリエンスの概念は、幾度も議論されてきました。ラムサール湿地条約はこれらの概念を検討し、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)による、生態系の繊細さと適応能力またはレジリエンスの双方を含む脆弱性の定義を採択しました。これにより、レジリエンスは適応能力と同等であるとみなされました。さらに、脆弱性は具体的な空間的・時間的尺度で決定されるゆえに変動します。ある湖沼または湿地が特定の圧力に対しては弱いことがあっても、他の場合においてはそうでないこともあるのです。面倒なことに、現在の状況も別の時期においては脆弱性の指標として好ましくない、とうことが起こり得ます。これらの定義上、概念上の課題は重要で細心の注意を払うべきことですが、それに時間をかけるあまり陸地の湖沼や湿地で起こっている変化の考察が遅れてはなりません。既に知られているように、こうした湖沼や湿地は気候変動をはじめとする数々の圧力に弱いのです。

我々は以上のことを念頭に、湖沼や湿地が特徴づける多様性の範囲を検討し、とりわけ植物種が底泥の種子バンクに蓄積された栄養繁殖体を通してどのように反応するかという点において、過去から現在のタイムスケールに着目しました。これらの生態系が受ける圧力の幅は広く、各々の生態学的特徴を形成する生態学的過程に強い影響を与えてきました。それ故に、「湖沼と湿地はこうした圧力にどれほど脆弱であり、我々にかかる変化をどう解釈するか」すなわち、「こうしたことをどれだけ理解し、生態学的状態における変化の情報、つまりは種組成やその変異性、栄養塩と塩分濃度の変動、生産性、季節毎・1年毎・10年毎の連続的な変化について、十分に知っているか」という疑問点に今、我々は取り組んでいます。

これらの生態系に生息するいくつかの脊椎動物の個体数、少なくともその生活環に関する情報は多く手に入る傾向があります。しかし、乾季に最も広範囲に生息する脊椎動物がいに生態系の状況を形成するかについての情報は十分でないことがあります。したがって、湖沼や湿地を調査する際はどのように乾燥に対抗するのかという課題は、雨季を象徴するような植物がいに乾季を生き抜き、あるいは雨季にいにしてその生息を確立させるのか、そして乾季中に植生が枯れることは影響するのか、などという疑問にもつながっていきます。さらには、塩水と淡水という二つの状態が交互に起こることや、そのような状況の下で生物が水中と底泥中の両方で活発に生息できるということもあります。こうした情報によって、これらのシステムが感化されやすいかどうか、固有のレジリエンスはどこから来るのか、ということがより見極めやすくなります。それは、これらのパターンやその相互作用の説明に役立ち、陸地の湖沼と湿地の管理にとって信憑性のあるシナリオ作りの基礎を形成する概念モデルの開発につながります。



発芽実験中の種子バンク

国際越境水域評価プログラム・湖沼グループのポータルサイトを開設

国際越境水域評価プログラム(TWAP)は、地球環境ファシリティ(GEF)の資金援助を受けて実施されたプロジェクトで、越境水域システムを地球規模で評価し、人間活動の影響に対する脆弱度をランク付けすることを目的としました。ILECは湖沼水域を担当し、2009～2011年に評価手法を開発、2013～2015年には国連環境計画(UN Environment)、滋賀大学環境総合研究センターおよびテキサス州立大学水域研究所の協力の下、評価を実施しました。このプロジェクトの最終報告書は2016年5月に公表されました。ILECは開発した評価手法、評価データ、評価結果および評価過程から得た重要な知見を掲載するポータルサイトを2017年8月に開設しました。

ILEC TWAP Lakes Portal



URL: <http://ilec.lakes-sys.com/>

南米ILBMワークショップをブラジルにて開催

2017年7月28～29日の2日間にわたり、ILECはブラジルのリオデジャ



ネイロにて、統合的湖沼流域管理 (ILBM) のワークショップを開催しました。当ワークショップは南米でのILBM推進を目的に、同地域5ヶ国 (アルゼンチン、ウルグアイ、コロンビア、チリ、ブラジル) より専門家や若手研究者を招き、当財団の科学委員長を務めるウォルター・ラスト教授

(米国テキサス州立大学) が基調講義を行いました。数年前にILECにてJICA委託研修を受けていたブラジルの国家水資源局 (ANA) の職員も駆けつけていただきました。当財団の科学委員を務めるサンドラ・アゼヴェド教授がファシリテーターを務め、今後の南米地域での湖沼流域管理にお



元JICA研修員からの便り

ライトワン・タカウィラ・マルフ (ジンバブエ)

私は2015年度に日本で実施されたJICA研修

「湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理(ILBM)」コース受講者9名の一員です。このコースは、湖沼が抱える問題の解決方法を実践的に提供してくれるものでした。帰国後の現在、私が水生生態学者としてジンバブエ大学生物科学部にて講師を務める上で実践している活動につき報告できる機会をいただけたことを嬉しく思います。

チベロ湖は、ジンバブエの首都であるハラレを含む、ルワ、ノートン、チトゥンギザといった周辺都市の工業・生活用水の主な水源です。また(スピードボートやバードウォッチング、競技観戦など)レクリエーションの場としても機能しています。また地域の重要産業である漁業の場でもあります。こうした重要な湖ですが、現在、流域での(点源・面源からの)



廃棄物投棄問題について現地で説明する筆者

汚染に起因する富栄養化の問題を抱えています。また、湖は(集水域の)最下流に位置していることから、域内における活動の全てが湖に影響を及ぼすという特徴を有しています。

次に、私の研修受講後の母国での活動についてお伝えします。

研究とモニタリング：資金難の問題を抱えながらではありますが、過去2年間に4名の学生による、(チベロ湖への流入河川である)マリンバ川とムクベシ川の問題に取り組むプロジェクトを実施しました。また、(流域内の)複数の湿地では3名の学生が活動しました。更に、学部として修士や博士課程の学生も参加させ、湖の重要な事項に対する活動、例えばGIS(地理情報システム)を使った堆積物の量や質に関するモニタリング等を行っています。

さらに今後の活動計画としては、1) チベロ湖流入河川に対するモニタリングの継続、2) チベロ湖流域内湿地の監視と保全に向けた活動の実施、3) 水に関する専門家や政策意思決定者に対してILBMのコンセプトを教授し、育成する修士課程コースの開発(現在進行中)を予定しています。

人材育成：ILBMの概念について、既に学部生に対しては教授しているところですが、更に将来、流域管理者や水の専門家、水生生態学者になる候補者を育成するための修士課程のプログラムを開発したところであり、同プログラムは現在大学による承認を待っているところです。また、ILBMを推し進める一環として、ハラレ市議会や他のステークホルダーを対象として、水質管理と監視に関する短期間の研修も実施しています。

啓発：私は、チベロ湖に与える影響に関して全国ネットのテレビ局(ジンバブエ放送協会)のインタビューを受ける機会に恵まれました。このインタビューで私は、チベロ湖の管理においてILBMのコンセプトが有効かつ重要であることを強調したほか、侵略的外来種(ホテイアオイ)問題への対処法の可能性についても議論しました。

ける各国の協力体制強化に向けた様々な戦略や知見が議論されました。本ワークショップの現地開催に多大なご協力をいただきましたリオデジャネイロ連邦大学カルロス・シャーガス・フィリオ生物物理学研究所と、同研究所のアゼヴェド教授、そして参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。



2017年度 びわっこ大使の活動と世代間交流会

ILECは2017年度も、滋賀県からの委託事業ラムサールびわっこ大使事業を実施しました。湖国の未来を担う環境保全活動の次世代リーダー育成を目的として2008年度に始まった本事業では、毎年、滋賀県内の5、6年生より6～10名を「びわっこ大使」として選出し、国内外での活動発表に向けて学習会や交流活動を行います。ILECによる本事業の受託は2015年度より3年連続となります。本年度は「漁体験を通して琵琶湖に生息する生き物と湖魚食文化について学ぶ」をテーマとし、10名の大使が熊本県で開催された「KODOMO湿地交流 in 荒尾干潟」(ユースラムサールジャパン主催、アジア湿地シンポジウム2017協賛)での活動発表・交流に向けて学習を重ねました。

第1回(6月24日)の学習会では刺網漁を体験し、捕れたフナやニゴイを煮つけや唐揚げにして食べました。自らの手で捕まえた魚を料理して食べるという、貴重な体験ができました。第2回(7月23日)は、午前には琵琶湖特有の伝統漁法であるエリ漁を体験し、ブラックバスなどの外来魚が在来魚に与える影響を勉強しました。午後には滋賀県の郷土料理「鮒ずし」を漬けました(写真①)。滋賀県の2つの伝統を学ぶ貴重な機会となりました。第3回(10月14日)は、琵琶湖固有種セタ



写真①

シジミの手搔漁に挑みました。年々減り続けていたセタシジミですが、個体数を増やす研究や取組によって少しずつ状況は改善に向かっているようです。また、8月23日には初の試みであるびわっこ大使世代間交流会を開催しました。初代から現役のびわっこ大使が一堂に会し(写真②)、琵琶湖の湖魚と滋賀県の野菜をふんだんに使った料理を作り交流を深めました。これらの活動を経て、11月4～5日に参加した上述の熊本県での交流会では、日本各地の湿地で環境保全活動に携



写真③

わる5つの団体を前に、滋賀県や琵琶湖について発表しました。また、他団体の子どもたちとチームを組み、干潟でのフィールド調査(写真③)や壁新聞づくりを行うなど、有意義な時間を過ごすことができました。そして2018年1月27日に琵琶湖博物館で開催されたILECの30周年記念シンポジウムでは、世界各国から参加した聴衆の前にこれらの活動を発表しました。この1年の活動を通して、大きく成長したびわっこ大使たちの今後のさらなる活躍を期待します。



写真②

ILECの活動概要 (2017年度)

- 4月 11～29日 グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省)
- 5月 9日 関西アーバン銀行よりeco定期預金の寄付として、163万円を拝受 (大津市)
- 24日 近畿労働金庫より社会貢献預金すまいるの寄付として、25万円を拝受 (大津市)
- 6月 17日 近畿労働金庫労働組合滋賀支部USR学習会を開催 (草津市)
- 24日 ラムサールびわっこ大使第1回事前学習会を実施 (長浜市)
- 7月 23日 ラムサールびわっこ大使第2回事前学習会を実施 (守山市・野洲市)
- 28～29日 統合的湖沼流域管理 (ILBM) 南米ワークショップを開催 (リオデジャネイロ)
- 8月 4日 JICAエルサルバドル国オロメガ湖・ホコタル湖統合的湿地管理プロジェクト「湿地保全政策担当者研修」を実施 (草津市)
- 23日 ラムサールびわっこ大使世代間交流プログラムを開催 (草津市)
- 26～31日 クアンニン省ハロン湾地域のグリーン成長推進プロジェクト本邦研修を実施 (大津市・高島市・近江八幡市・草津市)
- 27日～ スtockホルム世界水週間にUN Environmentと共同名義で出展 (ストックホルム、9/1迄) **【写真①】**
- 30日 GEF中国湿地保護地域システム事業関係者6名がILECを訪問 (草津市)
- 9月 1日 JICA委託研修第2回「水資源の持続可能な利用と保全のための統合的湖沼・河川・沿岸流域管理」を開講 (草津市、10/27迄)
- 7日 ミャンマー国水環境管理及び環境影響評価制度の能力向上プロジェクト (水環境管理分野) 2年次第3回カウンターパート研修を実施 (草津市)
- 8～14日 マレーシアの河川流域環境教育現場等を訪問 (クアラセランゴール) **【写真②】**
- 14～16日 日台産業協力架け橋プロジェクト水環境ビジネス技術交流会・商談会に出席 (高雄市)
- 10月 14日 ラムサールびわっこ大使第3回事前学習会を実施 (大津市・草津市) **【写真③】**
- 16日 滋賀県立守山高等学校の生徒、教師7名がILECを訪問し、JICA研修員と交流 (草津市)
- 17～21日 びわ湖環境ビジネスメッセへの参加等のため、ベトナム・クアンニン省関係者等3名を招聘 (大津市・草津市・近江八幡市・長浜市)
- 11月 1～2日 第17回世界湖沼会議プレ会議を茨城県と共催 (つくば市)
- 4～5日 ラムサールびわっこ大使が「KOODMO湿地交流in荒尾干潟」に参加 (荒尾市)
- 7～11日 第8回アジア湿地シンポジウムにて事例発表と出展 (佐賀市)
- 13～25日 グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加 (クアンニン省)
- 25日 ILBM-ESSVAワークショップを南アジア国際湿地保全連合と共催 (デリー)
- 27日～ 日本・アジア青少年サイエンス交流事業を実施 (大津市・草津市、12/6迄)
- 28～30日 ILBMケニア国内ワークショップを開催 (ナクル) **【写真④】**



写真①



写真②



写真③



写真④

2018年

- 1月 24日 科学委員会の幹部等が第17回世界湖沼会議準備協議のため茨城県庁と霞ヶ浦等を訪問 (水戸市・土浦市)
- 25～26日 ILEC科学委員会総会を開催 (草津市) **【写真⑤】**
- 27日 ILEC30周年記念シンポジウムを開催 (草津市)
- 2月 26日～ ラムサールのプレCOP13アジア地域会合に参加 (チラウ、3/2迄)
- 27～2日 西アフリカ統合的静水動水域管理 (ILLBM) ワークショップを開催 (ダカル、3/2迄)
- 3月 4日 ラムサールびわっこ大使が滋賀県副知事へ1年間の活動を報告 (草津市)
- 15日 「メキシコの河川湖沼生態系復興フォーラム」に出席 (パックアロ)
- 18～23日 第8回世界水フォーラムに出席、特別セッションを滋賀県と共催 (ブラジリア)



写真⑤

WLC17 プレ会議 / 流域政策研究フォーラム

今年2018年10月に、茨城県各地で第17回世界湖沼会議(WLC17)が開催されます。これを前に、2017年11月1～2日の二日間にわたり、本会議のメイン会場となるつくば市にて日本国内の市民や湖沼流域管理に携わる行政官、研究者等を対象としたWLC17プレ会議が催されました。初日は茨城県が公開シンポジウムとして主催し、およそ400名が出席。前半は元五輪マラソン選手の有森裕子氏が特別講演を行い、「スポーツを通して感じる霞ヶ浦の魅力」と題し、自然の恵みの中でこそ育まれる健康なからだづくりの大切さなどについて訴えました。後半は琵琶湖、三方五湖、霞ヶ浦より4名のパネリストを招いた討論

が行われ、それぞれの湖沼での自然再生保全や水質・生態系保全の取組について話し合いました。ここでの議論はILECが主催した二日目の「流域政策研究フォーラム」と題した専門家会議にも引き継がれました。北は秋田県、南は鹿児島県より14湖沼(釜房ダム、八郎湖、田沢湖、十和田湖、田沢湖、猪苗代湖、霞ヶ浦、手賀沼、印旛沼、諏訪湖、野尻湖、佐鳴湖、油ヶ淵、琵琶湖、池田湖)、そして国(環境省、国土交通省、国立環境研究所)より行政担当者や研究者延べ50名近くにおいでいただき、「水質」と「生態系」のテーマごとに議論を深めていただきました。総じて一日足らずの会議では踏み込んだ議論を



することはできませんでしたが、国内湖沼流域関係者のネットワークが広がり、日本の湖沼政策等における新たな問題提起も生まれました。これを機に来年の本会議では国内外よりさらに多くの参加者とともに、より広く深い議論ができることを期待しております。

新規役員のご紹介

評議員

〔2017年6月13日～4年以内に終了する事業年度のうち最終の事業年度に関する定期評議員会〕

井 手 慎 司	滋賀県立大学 環境科学部 教授
高 砂 利 夫	滋賀県琵琶湖環境部 部長
中 村 玲 子	ラムサールセンター 事務局長
西 野 麻知子	びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部 教授
松 井 和 彦	株式会社日吉 技術部 部長
松 井 三 郎	京都大学 名誉教授
山 口 真 矢	株式会社堀場アドバンスドテクノ 営業副本部長

理 事

〔2017年6月13日～2年以内に終了する事業年度のうち最終の事業年度に関する定期評議員会〕

竹 本 和 彦 (理事長)	国際連合大学サステナビリティ高等研究所 所長 元環境省 地球環境審議官
中 村 正 久 (副理事長)※	滋賀大学 環境総合研究センター 特別招聘教授 元滋賀県琵琶湖研究所所長
久 保 加 織	滋賀大学 教育学部 教授
篠 原 徹	滋賀県立琵琶湖博物館 館長
清 水 芳 久	京都大学大学院工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター 教授
高 木 浩 文	滋賀県琵琶湖環境部環境政策課 課長
廣 木 謙 三	国連－世界銀行ハイレベル水パネル シェルパ 元国土交通省 国土交通大学校副校長

※常勤

監 事

〔2017年6月13日～4年以内に終了する事業年度のうち最終の事業年度に関する定期評議員会〕

菱 刈 学	公認会計士・税理士
櫻 田 満	関西アーバン銀行 常務執行役員

顧 問

浜 中 裕 徳	(公財) 地球環境戦略研究機関 特別研究顧問、元環境省 地球環境審議官、 前国際湖沼環境委員会理事長
---------	---

WLC17各種受付開始・第二回開催案内書発行

第17回世界湖沼会議(WLC17)の参加登録、論文の受付、その他各種プログラムの申込が始まりました。詳しくは公式サイトをご覧ください：www.wlc17ibaraki.jp



詳細なプログラム等を記載した第二回開催案内書も発行されました！



重要日程

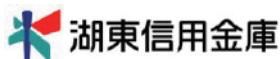
- 平成30年3月30日(金) : 学生会議発表募集締切(一次募集)
- 平成30年4月20日(金) : 霞ヶ浦セッション発表募集締切
: 分科会発表募集締切
- 平成30年4月27日(金) : 学生会議発表募集締切(二次募集)
- 平成30年5月7日(月) : ワークショップ企画募集締切
- 平成30年5月31日(木) : 展示会出展者募集締切
- 平成30年6月下旬〜7月上旬 : 採択結果通知(学生会議・霞ヶ浦セッション・分科会)※1
- 平成30年7月16日(月) : 早期参加登録締切 ※2
- 平成30年9月14日(金) : 事前参加登録締切 ※2

※1: 採択通知の時期は前後する可能性があります。予めご了承ください。

※2: エクスカーション、歓迎パーティー、参加者交流会及びオプションツアーは参加登録時にお申し込みください。
なお、申込多数の場合、ご希望に添えない場合がございますので、予めご了承ください。

ご寄付・ご協力ありがとうございます！

●2017年に寄付のご協力をいただいております企業・団体様のご紹介 (順不同)



●2017年に賛助会員(法人)として会費をいただきました企業・団体様のご紹介 (一口 3万円:二口以上の会員様のみ) (順不同)



ILECの活動へのご理解とご支援を賜りたく、寄付のご協力および賛助会員へのご入会をお願いしております。寄付金、賛助会費には税制上の優遇措置が適用されます。財団のホームページにてクレジットカード決済での申込みも受け付けております。詳しくは www.ilec.or.jp/jp/advertise をご覧ください。

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)



〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会
— 事務局 — Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

*本ニュースレター最新号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。